

蝦夷常用集

二

太政官文庫			
		七	和
		七	書
		九	
		八	
八	九	八	
冊	架	函	號

內閣文庫			
		七	和
		七	書
		九	
		八	
七	八	一	
函	架	冊	類

內閣文庫	
番號	和 7798
冊數	8 (2)
函號	178 248

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

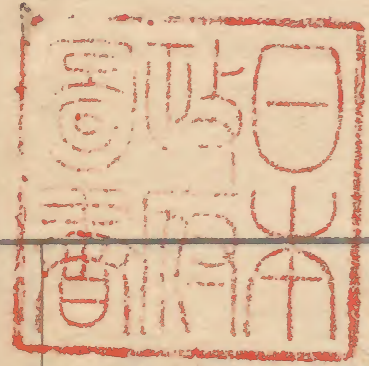
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





ア
エ
シ
ア
マ
ノ
園



明治十年
藤島



夷人の食は鳥獸魚と乃肉を食ふ用少く之も不毛の
 地なり米穀乃類の生るる所ありといふ所あり
 らん又米穀の類を食ふ事作らざらん
 何れを食ふ小圖を食ふ所なり種なり一鳥赤
 乃類ありこれを假夷人といふ所の地を食ふ作らざらん
 食乃一助と稱する事あり

但し極北の地子モロソナリ島あり之の所の夷人の食は
 之れを食ふ物作らざらん何れを食ふ事作らざらん
 其の地を食ふ事作らざらん何れを食ふ事作らざらん
 其の地を食ふ事作らざらん何れを食ふ事作らざらん

松よりいよいよ深おを作らばわさか知り及
まゝなる也然る米穀の類は生せざる地よりみ
あつたはる小 幸邦の人能行きく住居するもの
麦アツたは菜大根とて紙作ふく生熟を分る也
是をアユシアマ、坐稱をアユとて刺をいひウシとも在るを以
ア、と穀食の通称あり刺のある穀食といふ也志の稗
の穂より刺は多くあつたはる之より作り夷人の傳へたる
とて海を以て國離けし初免天より火降神降りて此
種を傳へる事ありて於しより作りてのありたる事

然るゆへに是をさふり大くあつたはる作らばるふり食す
る事ありて乃ち之より心を用ふる事也其次方を後の事
ありて之より是を以て出づる稔とて之よりありてはる事
ありて其坐稱を以て家の側より之を定むる事ありてはる事
と稱し神明の在るを以て尊とて之より事也志又後の
國より之より此稗を要相及び松布の地より之より作ら
る事ありて蝦夷稗と稱す外の穀類より之より地は肥瘠小
なりてすくなく生熟し荒凶の事なりとて之より蝦夷稗
と稱す事あり 幸邦の地より之より物ありて蝦夷の地

とあり傳へ来りて其をふりてわく稱を多しありやとあり
とへいんは成 本邦米穀のちふれんくふ今も田
稗をへし田稗とて之を田のふ限るはすなへし稗漢の
地から極る事をもて其く生熟をるはれり今世此人
をたよれつひの野草と同しとれやうおお不をる也
をいれ上古の時米穀の類はゆき豊饒ありたりしは
あ摺られれをり作り用い、るやあるし、その後米穀
の類は穀のゆきふあけより自らこぼるるを鹿細ある物
とて作りて者もれくた、奥羽ありいふ松前とありの地

あぐの、稀小作まうるのみありたるは、ゆるく蝦夷の名を
得るるを今ふ及びるは、蝦夷の地あり、此は作り用
事よりいへ、おのつるある名を唱ふるを、海に、
ちか如きま、く田稗と露多るるは、とて、
福と、人のふよあり、生熟の性を、
原野荒草、因小混、生すると、自ら、
少、は、あ、
稗の二種あり、本邦の地お、
と、

き此の玉ありては 蝦夷のくち極北の地におもむるとは 後を 梁稗
 大根菜とふを 幸邦の人より傳へて作る 夷人ともふ多し
 蝦夷のくちシリキシナイをとりて作る所あり サルをとりて作る所あり
 の夷人をとりて作る事
 是を糧食小供するもよありては 魚鳥乃肉ともふ比を
 厚きより此のくちすといふもよありては 蝦夷の地におもむるとは
 米穀の類の生するもよありては 蝦夷の地におもむるとは 米穀の類を食
 するもよありては 蝦夷の地におもむるとは

ラタ子根圖





ラタ子と稱するものラタツキ子と云ふを略せ其の云葉也ラと
 をす食する草其根を以タツキ子と云稱するを以
 と根根と云ふ也此草の形ふやわくを稱す
 る也是又國開きたる初め火の神降りたまひアユシアマ、
 と因りく傳之給ひアユシは傳へるもの外ふそのと蝦夷の
 うちの地の地も作あり饗食の助けと云ふあり
 但し極北の地子モロクナシリ島との東人傳へるあり
 をアユシアマ、小論にたと同く云ふと云ふなり
 是れ本邦野菜類のうち小考するにすふもの蔓草也

一種あり其食さるる根菜と云ふ用ゆるる全く蔓菁と異
なれりあつて味と又同一美人のよひ傳つることを
此菜をよつ子の菜と云ふなり御毒の氣ありと
疾病の人と之とも此菜を限らるる心を食せし
むるや也と云々 蝦夷のうち極小の地にあつたる所
土地の美惡より作らるる作らるる熟するあり
多く作らるるとあつて人なり荒凶のとの備へ
る便なり

右の二種を蝦夷の淵けー初より自然に生るるたる

しと外を傳り植たる物ありあつて此うちアエシアマ、を
穀類の一種ありラタ子を菜類の一種あり是れを
考ふるは後來より及び人民昔遠く耕耘の力を
致し稼穡の務を盡さるるありあつて人なり米穀
菜草の類を然とてて蝦夷の地は生せんものと
た初るるは此より後小島をるる路を此二種のを
の成作りあつたり食さるるに及ぶるは此が美人と云ふ
心を用るるを録するあり



ムシカルの圖

此の圖は、ムシカルの姿を写したものである。彼は、
 長いパイプを手に持ち、静かに座して居る。彼の
 服装は、簡素な布製の着物である。彼の足元には、
 刀と小さな杯が置かれている。背景は、淡い色
 のぼかしで表現されている。



右二種のと結を作るをすく称トイタとトイ土
 越い夕を掘るをすく土を掘るといふ也又一平ハ
 トイカルともいふトイ土上小同トイカルを造る事越い土
 を造るといふ事也之川共小 本邦の語トイハ越越耕
 作あといえん如くす場圃あといえん如くし

耕作と場圃と殊おうりたるあるをわくといふ此
 ちとるを夷人の境を古の古語トイハ言渡の事多
 くの事為す毎業も少しありて不此二種の
 物を作らう如き作りたる事をもとるを新く

トイタといひて作る地ありて場圃のや海に方所をも
まゝ稱してトイタといふあり元來知られる事 幸邦の事
小比にては福に難きことあり之是より後其言禁を
知りて其の如く多くいある事を皆其の故と云ふべし
夷人のあつては其ののりをあはる地の美惡をこゝろめあ
はるるのちこゝろを山中の不平ある地ある樹木の陰ある等
トイタといひて作る事也

但し地をこゝろめあはる事ありてはまたたけりてあは
らる外あり打つてふさふさなうこゝろゆしと云ふ事あり

の性を物より深くえと云ふ事ありてはこゝろをこゝろめ
此等の事ありて別な意味のありてはこゝろめあはる事あり
是の事ありては遠く北尋の上縁をい

是小圖に多々ある事ありてはトイタといふ事ありては初め
此地の草をこゝろめあはる事ありてはトイタといふ事あり
カルをいふ事ありては初め草をこゝろめあはる事ありては
此のトイタの事を初め草をこゝろめあはる事ありては初め
すべしと云ふ事ありては初め草をこゝろめあはる事ありては
の事ありては女子の事ありては初め草をこゝろめあはる事あり

草紙の系に於て先づ此と云ふ後小イナヲをなけり神を
祭る事あり其外種を祭る時あり其熟をなす及ん
其收るの時と云ふも其神を祭るの事あり其
其を洋し其を遺り其縁の事なり

其の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり
其の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり
其の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり
其の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり

地の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり
トイタの事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり
の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり
其の事あり其を遺り其縁の事なり其を遺り其縁の事なり





ムシウフイの圖

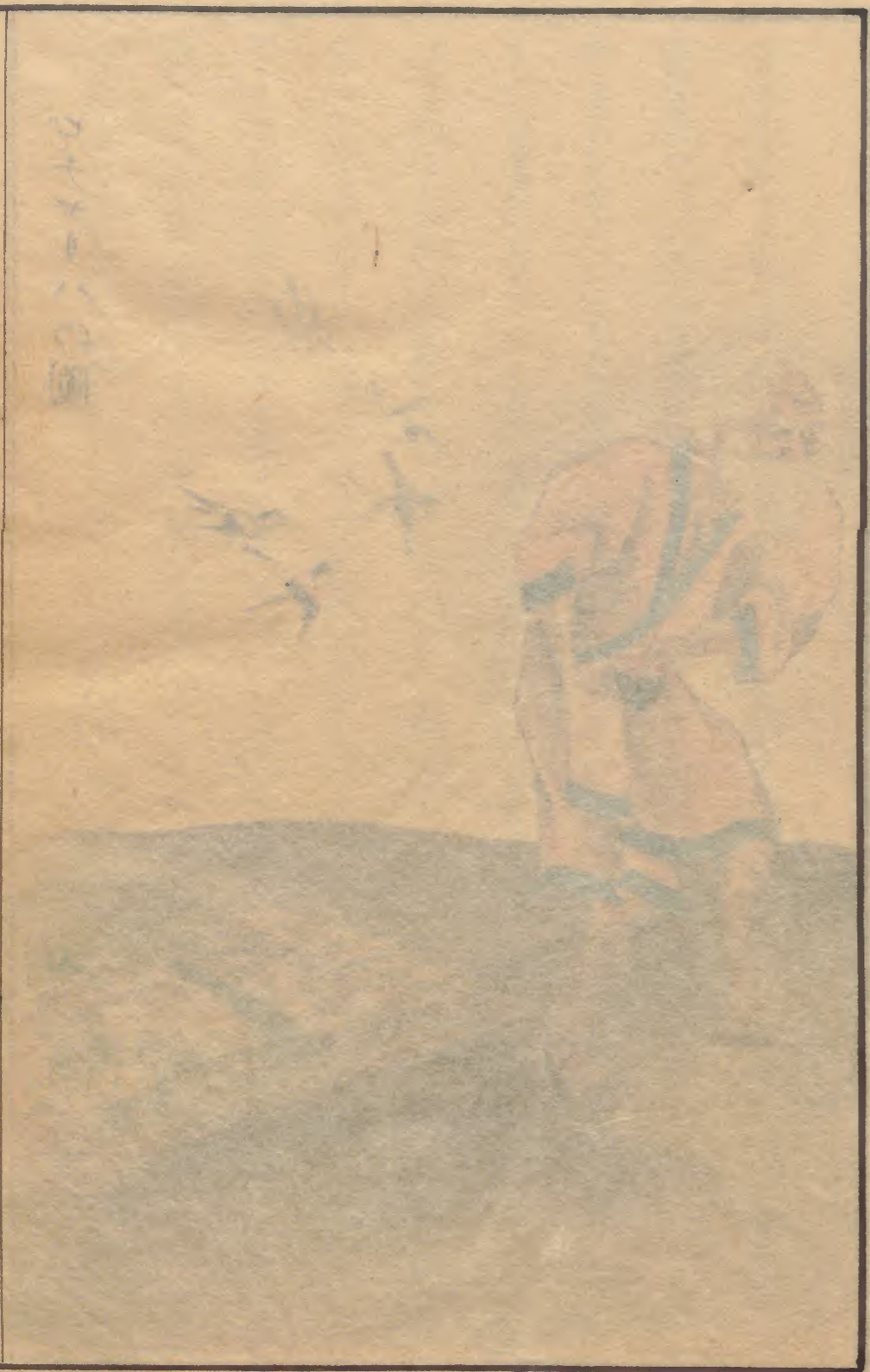




トイラツカの圖



草伐焼くは其地の土を平らるふなる事あり是をトイラ、
 ヲカと称すトイラ前田同——ヲツカと云を庵く物を平らる
 小す事成ひは土を多くふあすといふ事あり夷人の
 境未和との器もあはれ地をあらきやとの事 幸邦
 あく隴畝あは耕作を多しと云はるは阿は唯地小
 ある本は根あは土をいとふの物乃種を前さるけとある
 べき物を園のそくタシロと云はるはあはくきり除くの事ある
 之タシロと云はる物を 幸邦トイラ庖丁の鉄ありあ——ハ
 器賤の部ありと云はる



ピチヤリパの圖



ト



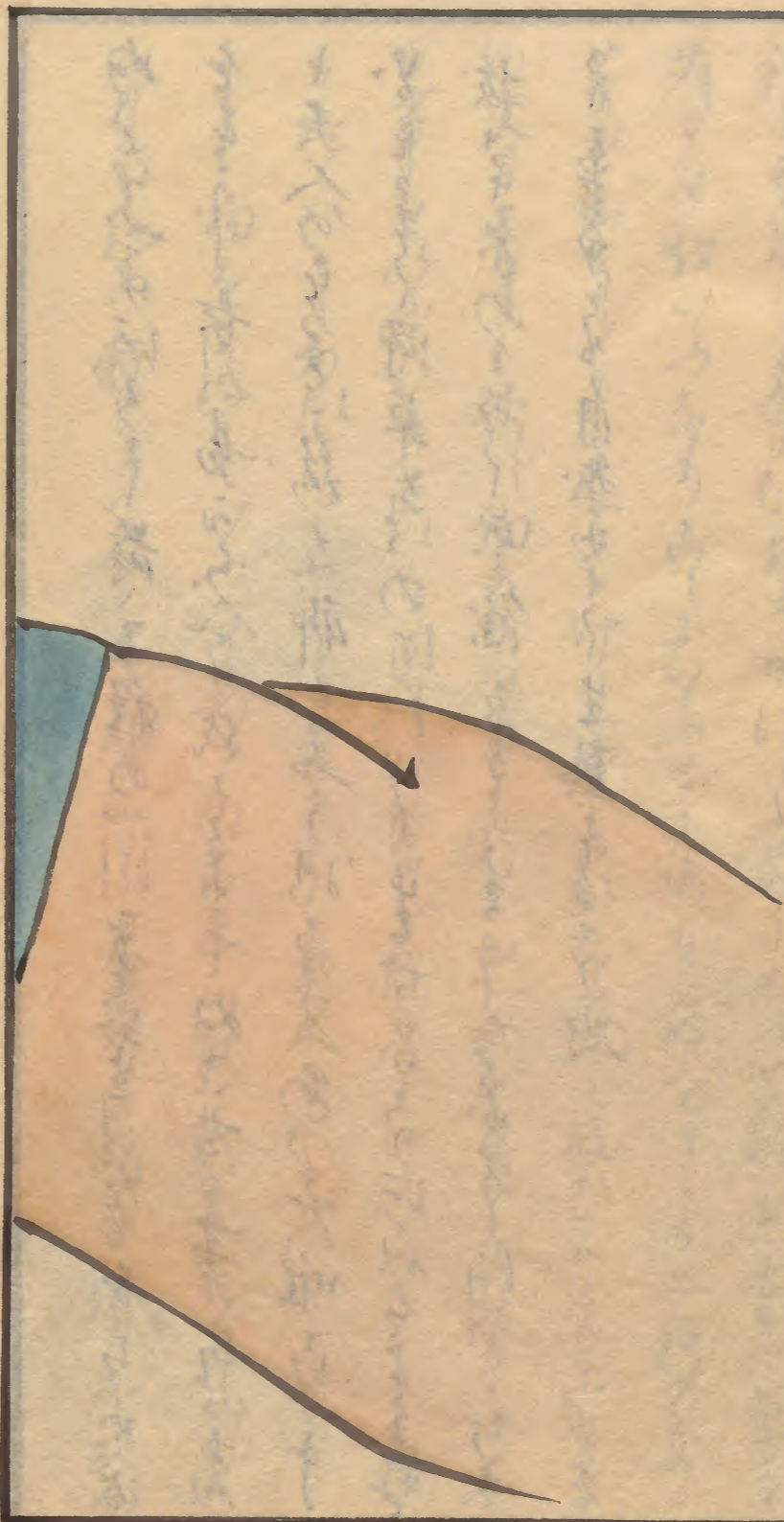
土をあらする終りくそれより種を蒔きて是をセチマリパヤ
 種をピキキ走く物の種をソヒチマリパヤ蒔きて種を
 ずくといふ也おら於トイタのり地の善悪をえぬといふ
 りもいふ也又二年なかり用ゑるもあつたはこれ種
 を蒔くのに珠心を用ひて時節をわくつる也其時節
 と之ふもとせよあり曆といふ物もあつて時日を以て比と定
 めるといふやあつたは時節をわくつる也其時節をわくつる
 の節はたのつる生いぬをうわひて種を蒔く時節
 とらあつるもいふも夫の境時候といふも夫寒暖の

通達ふらあり種を蒔く時節も又うまきり先つ於月よ於
 奉邦の時節といふも四月の半より五月の半にあつたは
 あふふふたり所を種を蒔く土を履ふといふもあつたは
 是れ雀や鳥小鳥いふも自然生のもありたり
 をあつたはあり

ムニカル結圖



テケヲツタセイコトク乃圖



是をアユニテ、熟するの時小及くその種をきりたるため小手に
具は法をきるゝゆかりテケヲツタセイコトクとツるをテケとツ
たりをいひツタを何にとツにの字の意ありセイを具を
いひコトクを附る事をいひ手に具は附るゝる也

小刀は用申る具を夫語ハビセイとツる之を小刀を種あり
る如くふりこきこゝ手に附るなりセバセイを別ハ具類の部ニ
番〜〜〜とあり

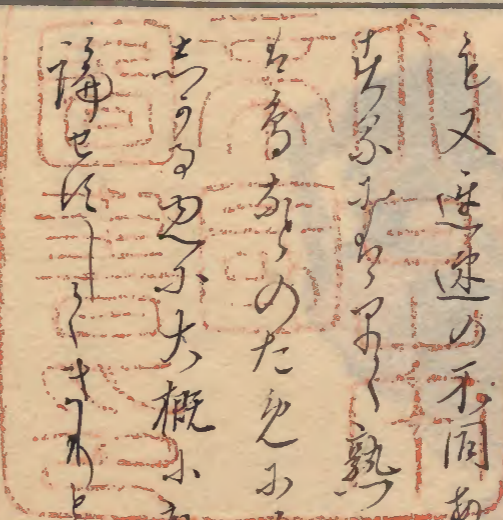
おとけ種成するおとくれこ色成用いゝきふるゝの決一ト
小刀もこの物と〜〜と物を用申するのハあつて其柔羽の古國の

申すれも種をきふるゝ右の如く具を用申するもあつて
〜〜



ウブシトイ乃圖

是圖を前より如く小具成つてあるアミアの穂をうむ
 也ウブシトイよふるちウブシを穂にするをいひトイを切るを
 いひ穂をきるといふるありてその自然の生るる多かり
 作したるよりゆへにその長の短もいひに穂は熟する
 毛又遅速の不同ありて残らぬ熟するをきちり收りし
 其家よりありて熟したる穂は実れ落ち散るるも有り或
 ち有るものたれお喰ひをきりてありて其採集し不
 なるものも大概小熟する候待て実のりふ同ある事
 候也其しつとありて其も也其きりてありて及ひ根とあり



そのまゝにまき置ても来年小実ありて其地は極人とする

時をきりて按去りて焼く也

此穂をきるの時をおろし我八月の半より九月の半
 といふ候なり



Handwritten text in vertical columns, likely a document or letter, written in cursive Japanese (sōsho). The text is contained within a rectangular border. There are several red seals (hanko) visible: one at the top center, one on the right side, and one at the bottom right. The paper shows signs of age and wear, including small holes and stains.

278

